PROJECT

新たな「手芸」の構築をめざして

文
上羽陽子

共同研究 ● 現代「手芸」文化に関する研究（2014-2017）

本共同研究は、2014 年 10 月からスタートし、2018 年 3 月まで 3 年半の計画で実施される。本稿の執筆時には共同研究会が開催されていないため、ここでは本共同研究を立ち上げることになった背景や研究目的、めざしている方向性について述べてみたい。

手芸という枠組み

手芸とは、手先の技術およびそれによる制作活動をさし、主として糸、布をもちいて、家庭内の実用品・装飾品などをつくる手仕事の総称とされる。具体的には、刺繍、編み物、アップリケ、ビーズ細工、人形細工などをさす。日本において手芸は、おもに女性を担い手とする、家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として、明治期に形成されたとされている（山崎 2005）が、この概念はどのように形成されてきたのであろうか。

結婚後の自身の衣装を刺繍しているインド西部ラバーリーの未婚女性（2001 年、インド西部カッチ県、上羽陽子撮影）。

本共同研究の背景には、大学時代の私自身の体験が深く関わっている。

大学で染織を学んでいた時、インドを訪れる機会があった。滞在中、私はインドの骨董品屋や土産屋に足を運び、多くの染織品を観察した。ところが、多くの染織布をみるほどに、私のなかに違和感が出てくるようになったのだ。それまで大学では、学生が刺繍や編み物、アップリケといった技術で作品制作をした場合、教員から「ここは芸術大学だから、そういったものは被服科や家政科でつくるべきだ」、「作品が手芸っぽくならないように」という厳しい指摘をうけることが多かった。当時の私は、深く考えることもなく、一般的に手芸とよばれる技術によって制作される造形物は、芸術性が低いと思いこんでいた。

しかし、インド滞在中、染めや織り、刺繍、アップリケといったさまざまな染織品のなかで、私が一番魅力的に感じたものは、グジャラート州カッチ県に居住するラバーリーとよばれる人びとの刺繍布やアップリケ布であった。芸術性の有無をどこで判断するかは、諸説あると思うが、私の考える芸術性とは、心が揺り動かされる、いつまでも眺めていたい、つくり手の感情をよみとることができるといったものである。数多くのインド染織品のなかでも、このような感情を私に与えてくれたのは、現在の調査対象であるラバーリーの人びとがつくりあげた刺繍布やアップリケ布であった。それらには、極限まで抽象的に文様化された自然物や動物が、鎖縫いやミラー刺繍の技術で、布一面に隙間なく表現されていた。整った縫い目と、微妙に形態が異なりながらも、生き生きと描かれる文様表現に私は魅了された。

そして、その事実に私自身が、とまどいをおぼえていたのであった。つまり、刺繍やアップリケのようないわゆる手芸といったものに、芸術性はないと私自身がいつの間にか偏見をもっていたことに、インドで気がついたのである。

また、インドの骨董品屋で度々、「どうして日本人は、染めや織りだとふっかけた値段でも購入するのに、刺繍やアップリケなどは高いといって値切るのか」と聞かれた。これはラバーリーの刺繍布やアップリケ布ばかりに興味をもつ私をみて、行く先々の店主が尋ねた質問であった。とくに興味深いことは、店主が欧米の観光客は刺繍やアップリケでも高い値段で購入するとつけくわえていることであった。

このような経験から、問いがうまれた。手芸とは、いったいなんなのだろう。芸術、美術、工芸との関係はどのようになっているのだろうか。刺繍やアップリケ、編み物などをひとまとめとする日本の手芸という概念は世界中にみられるものなのだろうか。それとも日本だけの概念なのだろうか。ま

NGO による商品用サリーへ賃労働として刺繍をほどこすインド西部アヒールの女性たち（2001 年、インド西部カッチ県、上羽陽子撮影）。

た、その領域はどこまでなのであろうか。

本研究は、以上の問題意識をもとに、同じ関心をもつジェンダーや美学・美術史を専門とする副代表の山崎明子（奈良女子大学）とともに議論を重ねて立ち上げた共同研究である。

東京ドームで開催された国際キルトフェスティバル（2005 年、東京、山崎明子撮影）。

研究目的

現在、世界各地で、従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。たとえば、アメリカ同時多発テロ事件以降に急速にニューヨークで広まったニッティングカフェ、日本都市部のカフェに集まり手芸をする刺繍カフェや編み物カフェ、7人の男性が手芸部員として活動する手芸集団「押忍！手芸部」、世界で展開されるキルト・フェスティバル、日本各地で開催される手づくり市やクラフト・フェアなどである。それらは、男性も担い手に含み、アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、趣味的手仕事がもつ災害後におけるケアや癒しとしての機能などが注目を集めている。

本研究の目的は、日本では手芸とよばれている、これら余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにすることである。そして、こうした従来の日本の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」としてとらえかえし、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな手芸概念の創出を目指すものである。

研究の意義

本研究の意義は、手芸という研究領域を開拓することである。現代の手芸をめぐる情況は、刺繍技術や編み物技術、技術の歴史に焦点をあてるような従来の家政学的研究ではとらえきれない。本研究では狭い手芸概念の枠組みを超えた手芸のひろがりを学問的対象として汲み上げ、現代社会における意義を通文化的に提示したいと考えている。

こうした研究課題を遂行するため本共同研究では、日本、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニアなどを専門地域とするメンバーの構成によって、世界各地の事例を扱えるようにした。さらにメンバーは、文化人類学、社会人類学、民族芸術学、教育学、社会学、経済学、美学・芸術学、服飾史の研究者および、造形制作の現場にたずさわっている繊維造形作家、工芸教育者、美術館学芸員で構成した。世界各地を対象とした分野横断的で学際的な比較研究が可能な研究体制となっている。

またこの構成は、研究者と実務者とをつなぐ研究ネットワークの構築のみならず、研究成果を博物館の展示やワークショップの開催という形でいかすこともできると期待している。

新たな「手芸」の構築をめざして

本研究では、家政学や文化人類学の分野を超えて、包括的なアプローチを可能にする基礎的概念の創出をめざしている。その過程において、美的に評価された美術や利潤を生みだす工芸に比べて二重に周辺化されてきた手芸の社会的・文化的背景を浮き彫りにし、既存の研究では基礎的専門用語として確立されている美術や工芸の枠組みを再考する。

また、近代における女性の領域の再編というジェンダー論的視点から、これまでの歴史学的手芸研究では周辺化されてきた手芸のもつ積極的意義を歴史的に明らかにする。家庭内に女性をしばりつける家父長制的な制度の産物として理解されがちであった手芸が、本研究で新たに提示する手芸概念をもちいて、家庭内において外の市場とつながる役割をはたしていた側面を明らかにできると考えている。

さらに、本研究では、人的ネットワークの形成、癒し・ケア効果、フェアトレード商品といった、いわば手芸を媒介して形成される場とその機能を明らかにする。これらを通じて、手芸の社会関係資本の民族誌的な記述と分析をおこなうことで、たんに女性による暇つぶしの仕事として軽視されがちだった手芸のもつ社会的側面を明らかにすることもめざしている。

【参考文献】

山崎明子 2005『近代日本の「手芸」とジェンダー』世織書房。

うえば ようこ

文化資源研究センター准教授。専門は民族芸術学・染織研究。インドの刺繍や女神儀礼用染色布などを中心とした手仕事について研究している。著書に『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼――ラクダとともに生きる人びと』（昭和堂 2006 年）、監修に『世界のかわいい民族衣装』（誠文堂新光社 2013 年）。